

久留米の自然



ヒナモロコが生息できる水路



ヒナモロコ (オス)



ヒナモロコ (メス)

久留米の自然 102号 2008年10月1日 写真提供 ヒナモロコ里親会

ヒナモロコ・コイ科 ハエジヤコ亜科 ヒナモロコ属 地方名・トンコツバヤ 全長・6～7cm 分布・北部九州、国外では朝鮮半島、中国大陸 学名・*Aphyocypris chinensis* Günther 絶滅危惧種Ⅰ類・久留米市の天然記念物

ヒナモロコ

山川 英毅

ヒナモロコは、日本がアジア大陸と陸続きだったころ(約170万年前～1万年前)、アジア大陸から流れ出る河川によって北部九州地方に棲むようになった淡水魚の一種だと考えられています。

当時は、伊勢湾から瀬戸内海にかけて第二瀬戸内湖沼群(東海湖、古琵琶湖、古大阪湖、古久留米湖等)が形成され、その水を集めた河川は、九州の西方で古黄河と合流して、共通の水系を構成して南西諸島の西側にて古東シナ海へ注いでいたと推測されています。日本が大陸と陸続きであったことを示す貴重な魚だといわれています。

ヒナモロコが日本で初めて学会で報告されたのは1937年です。農薬禍が出る1960年頃までは夏、にわか雨が降るとどじょうとともに田んぼの水口(ミナクチ)を大量に下り、網ですくわれてごはんのおかずとなっていました。

その後田んぼの基盤整備が始まり川の直線化とヨケがつぶされ、棲息場所がほとんど無くなりました。1991年10月に田主丸で確認されて以来その後棲息不明になりましたが、1994年11月に田主丸にて再発見され、ヒナモロコ里親会等により増殖が行われ毎年秋に数千尾が放流されています。又、本年度

よりヒナモロコ水路が出来自然界での増殖が期待されています。

ヒナモロコからお願い

私たちが安心して棲める様に、ヨケの再生を行って下さい。基盤整備の余地(アマリチ)に2～3ヶ所造って2～3年に一度交互に泥あげをし、底に木の幹・枝を置きヌクメとしてサギヨケ及び秋・冬場の棲家にして下さい。初夏に田んぼに水がはいったら、その田んぼに自由に出入できるように水口を造って下さい。

ヨケの出来ない所は各水路の巨瀬川の放流口近くに小さな池を造り越冬池として下さい。構造的には農事作業のみで管理出来る様に設計施行をお願いします。さらに水口と田んぼの高低差をなくし、平面にしてドジョウ(土生)・メダカ・タニシ(田主)の増加が出来る様に配慮をお願いします。

農薬については、害虫の発生とのおいかけっこより、自然農法(天敵にまかせる)にするべきだと考えます。このままだと私たちがまいってしまいます。除草はジャンボタニシに、害虫はカエル・クモ・トンボ・アメンボ等益虫や合鴨にまかせてみてください。

高良川流域のきのこ(その6)

角 正博

第97～99号では、子嚢と呼ばれる袋状の生殖器官をつくり、その内部に孢子(子嚢孢子)をつくる子嚢菌類を紹介してきました。再び「担子器」という細胞で孢子(担子孢子)を形成する担子菌類に戻ります。この担子菌類の中に特異な形状をした腹菌亜綱があります。通常は腹菌類と呼ばれている一群です。これからこの仲間を取り上げてみたいと思います。近年の研究で、腹菌類とされていた菌類の中にはイグチ科、ハラタケ科、フウセンタケ科等と深い関係があるものが次第に明らかになってきて、より自然な類縁関係に即した分類へと再検討が進められています。従来の腹菌類は形態の似た雑多なものを寄せ集めた人為的なグループであることがわかってきましたが、ここではとりあえず、保育社の『原色日本新菌類図鑑』に従っておきます。今回は高良川流域のホコリタケ目ホコリタケ科ノウタケ属の菌類を紹介します。

ホコリタケ科の分類では、子実体が「基本体(グレバ:孢子を形成する組織体)」とその下で柄部となって基本体(グレバ)を支える「無性基部」とに分かれているかどうか、その間に明瞭な「隔壁」があるかを確認するために割って断面を調べたりすることや、顕微鏡で孢子の外形や突起などの有無といった形状を調べるのが重要になります。

11. ノウタケ(脳茸) *Calvatia craniiformis* (写真1)(図1)

ノウタケ属の菌類で、高良川流域では9月頃をピークに6月上旬～11月上旬までみられます。晩秋には独楽状の無性基部のみとなって有機質の林縁や路傍に転がっています。

子実体は淡黄褐色～茶色で倒卵形、下部に無性基部があります。基本体を割ってみると、断面は未熟な時は白色です。熟してゆくにしながら外皮は皺ができて脳状になり、基本体の内部は黄褐色の液汁となって分解し悪臭を放ちます。さらに外皮が乾燥して破れ、やがて剥離

してゆくと褐色の綿屑状の塊となって孢子を飛散します。最後には独楽状の無性基部だけが残ります。孢子は球形です。

久留米市内ではノウタケ属の菌類として、他にスミレホコリタケ(ムラサキチドメ) *Calvatia cyathiformis*が、高良台や南町の久留米商業高校グラウンドの草地に9月上旬～10月中旬に発生します。スミレホコリタケは一般にノウタケより大型の子実体を作り、日当たりの良い草地を好むようです。未熟な時は、表面は白色ですが、次第に表面に紫褐色の網目模様を生じます。またノウタケの基本体(グレバ)が茶褐色であるのに対し、スミレホコリタケの基本体(グレバ)は紫褐色です。さらにスミレホコリタケの孢子は球形でイガ状の突起があることでキクメタケとも区別できます(図2)。但し、久留米商業高校グラウンドでは、2007年度のグラウンド大規模改修工事以降、発生を確認できていません。

またホコリタケ科ではオニフスベ属のオニフスベ(鬼贅) *Lanopila nipponica*を高良大社北側斜面で採集したことがあります。



写真1 ノウタケ 図1 ノウタケ孢子と弾糸

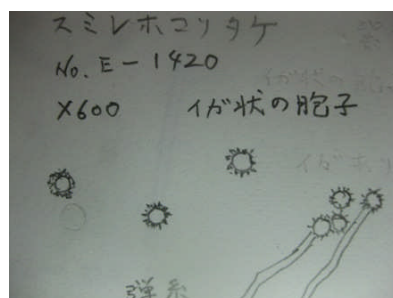


図2 スミレホコリタケ孢子と弾糸

郷土の樹木5

タマミズキ

猪上 信義

モチノキ科の落葉高木。陽樹で成長が早く、日当たりのよい適潤地を好みます。本州西南部、四国、九州の暖地に生育し、中国中南部、台湾に分布します。若い枝は赤く、やや稜があり、樹皮は灰白色、滑らかで皮目があり、幹はまっすぐに伸び、時に樹高20m以上になります。葉は互生、卵状長楕円形で、長さ7~13cm、縁に細かい鋸歯があります。

雌雄異株。5月頃、新枝の葉の脇から花序を伸ばして、緑白色の小さな花がたくさん着きます。ひとつひとつの果実は直径3mmと小粒ですが、30~40個集まって着き、葉が落ちる頃には赤く熟すので、遠くからでもよく見えます。

本県では標高500m以下の山地であちこちに生えていますが、特に県南部の高良山、黒木町城山(県の稀少植物群落に選定)、瀬高町清水山などでは群生する箇所があります。高良山では高良内側の斜面に多く、ユジイ林から頭を出している様子が、12月初めごろにはよく分かります。

材は黄白色で、軽くて柔らかく、細工物やコケシなどに利用できますが、数が少なくほとんど使われません。また小さな赤い実を多数つけるので、鑑賞樹として公園などに植えたり、野鳥のえさ木として環境保全林などに植える木に適しています。しかし種子からでは雄雌の区別ができるまでに時間を要するので、鑑賞用とするためには雌株を接木して、それを育てる必要があるなど、手間を要することもあってまだ一般には流通していません。

和名は玉水木の意味で、ミズキに似た樹形で、赤い玉のような実がつくことからついています。方言ではミズキと呼ぶ地方が多いようです。ほかにミズキという方言がある木としてはハンノキ、クヌギ、イイギリ、ミズキ、クマノミズキ、アサガラなどがあります。これらはいずれも、春先に枝や幹を切ると、したたるほどの樹液を出すようですが、実際に試したことはありません。ただサルナシやマタタビの枝を春先に剪定したときに、数日間にわたって樹液が止まらなくて、心配になった経験があります。事実東北日本では、山で水を切らしたときにはサルナシのツルを切つてのどをうるおすことが、広く知られています。またシラカバの樹液については事業化しようとする試みがあるほどです。そこでシラカバはともかく、自宅にキュウイフルーツを植えられている方は、春先に試して見られてはいかがでしょうか。

生き物に魅せられて その40

ナカグロクチバの巻

松永紀代子

2008年8月初め、三沢の田んぼを歩いた。稲の間にはホソバヒメミソハギなどが群生していた。稲にはナカグロクチバの終齢幼虫。南方系のガだけれど、三国ではごく普通で、ホソバヒメミソハギを食べていることが多い。

私はこの虫の飼育をしたことがあるが、繭は浅く土に潜って作っていた。水を張った田んぼにいる虫がどうやって土にたどりつくのか不思議だった。

目の前の稲にいる幼虫はほとんど上に乗っていく。葉の上の方に届くと、虫の重みで葉がぐくと曲がって隣の稲に届いた。虫は隣の稲に移ってまた上りだした。葉はまたぐと曲がって、畦の草に届いた。虫は草に移ると畦に這い上がった。水に落ちた幼虫もいる。こちらは体をくねくねと動かし、すぐに稲にたどり着いた。そして上り、同じように畦に達した。ナカグロクチバは稲渡りをしていたのだった。

ひととき 動物笑い話 その46

一角獣(ユニコーン) 現わる

イタリアの人がイギリスの親友に電話をかけた。「イタリアのトスカナ地方でユニコーンが発見されたよ」「それは伝説上の動物だよ。額にねじれた長い1本の角のあるウマに似ていて、イギリス王室の紋章でライオンと相對している」「本当だから。実は1歳のノロジカの頭部中央に角が生えているんだ」「ウマに角が生えていたら、そんな馬鹿なになるよ。元々角が生えるシカだから、怪我で1本欠けたとか、片側だけに生えたのじゃないの」「正真正銘、頭の中央よ。でも、角は毎年生え替るから成獣になって本来通り先端が3つに分かれたら、フォーク獣になるかも」「とにかく、信じられないな」「確(しか)と間違いないか、イタリアまで見に来〜ん?。百聞は一見に如かずよ。案内するから」

*ノロジカはヨーロッパから小アジアにかけて普通に分布し、体長約1.3m。なお、子鹿の名前はズバリ「ユニコーン」。(Y. Y)

福岡県指定天然記念物

恵蘇八幡宮の大樟

所在地 福岡県朝倉市山田字恵蘇宿 166

指定日 昭和38年1月9日

天智天皇が母（斉明天皇）を弔うために、喪に服したといわれる木の丸殿跡の恵蘇八幡宮は、国道上10数メートルの高さにあるが、その左側社殿前方の崖のふちに、1本の老樟がそびえている。

主幹は最初2本に分かれ、その中の1本は上方2メートル付近で2本に、他の1本は約3メートル付近で3本に分枝している。樹姿はのびのびとして旺盛な樹勢を誇っている。

木の大きさ

胸高幹周 9.0メートル

樹高 32メートル

根廻り 22.0メートル



外来生物

アメリカザリガニ

河内 俊英

ザリガニにはニホンザリガニ（ヤマトザリガニ）とアメリカザリガニとがいます。

北米原産のアメリカザリガニは、日本に持ち込まれた外来種であり、主に米国ミシシッピ川流域原産のものです。

日本に持ち込まれたのは、ウシガエルの餌用としてで、1927年に鎌倉市内の食用蛙養殖場が最初です。この養殖池から逃げ出した個体が、強い適応力を発揮して北海道を除く全国に分布を拡大しました。原産地ミシシッピ川流域では捕食者のミシシッピアカミミガメ、ウシガエル、オオクチバスなどの存在で極端な増殖は見られないようです。米国では名物料理として食べられ、案外美味でエビそっくりな味がするのですが、日本ではあまり食べられていないようです。

わが国では水田の畔に穴をあけ、イネの根っこを食い荒らすとして嫌われています。さらにアメリカザリガニが繁殖している水辺では、水草も小型水生動物も全て食べ尽くされる場合もあります。

飼育について：強い生命力から飼育は、簡単ですが複数個体を同じ入れ物に入れておくと、共食いが起きる、特に脱皮時期は狙われやすいので雌雄ペアで増殖するとき以外は、分けて入れておいた方が良いでしょう。水槽に、水濾過器を入れない場合は水深を浅くするか、陸地をつくっておいでやること。餌で水が汚れやすいので酸素を入れてやることと、水槽の底に砂か小さい砂利を敷き、隠れ家として筒状の管などを入れてやるとすみかにします。エサは煮干し、ちくわ、スルメ、ゆでた野菜その他多くのものを食べるが、便利なのは沈むタイプの熱帯魚用餌がおすすめです。

会員寄稿**高良山の茂み****若林 春美**

ここで言う高良山の茂みとは、大社の杜を中心とした、その周辺一帯の森のことを指しています。植栽された杉林などは除外しています。何故なら、大社の杜はこの地方の本来の森の様相を残していると思うからです。

一般に森はそれぞれの樹木の樹冠が幾層にも層状をなして生育している植物共同体です。

高良山のこの森は常緑広葉樹林であり、又、照葉樹林でもあります。その特徴は中型ないし小型の葉を、びっしりとつけ、それらが太陽に当たると、キラキラと輝いて見えるからだということはご存じの通りです。

この照葉樹は暖帯湿潤気候帯と亜熱帯湿潤気候帯に広く分布しています。しかし、これらが纏まって森林(樹林帯)として生育しているのは、地球上では、東アジアの一部だけです。即ち、青森・秋田・岩手の3県を除く東北南部から、本州・四国・九州・奄美・琉球・台湾、そして、中国南部に至る低地に、带状に連続して存在している、極めて大切な森です。高良山の森はその真只中にあります。耳納連山の茂みに、お詳しい方にお尋ねしなければなりません、太古は海底であったり、或いは、海霧が直接かかるようなところであったという証しとなる種類の樹が生育しているかもしれないなどと思っています。

一口に照葉樹林といっても、緯度の南北、海岸部と内陸部とでは、その樹種構成が異なり相観の相異が生まれ、そこに郷土色を観ることができ、同時に潜在的生産能の差異が生まれます。

いろいろな面で貴重なこの森を目の前で、自然の摂理と全く関係なく、変な姿に変貌させられてゆくのを見るのは、とても辛いと思われれます。私には森が本来の姿を続けてゆかせて欲しいと訴えているように思えてなりません。

法的には個人(法人?)の所有かも知れませんが、同時、この森は地域に住む人々にとっても、

掛替えのない、極めて大切な環境財産でもあるはずです。

それ故、広く衆知を集め、真にこの森が望んでいるであろう、自然味豊かな輝きとその一層の深さを増すにはどうしたら良いかを考えるべき時が来ていると思うのですが、皆さんはどうお考えでしょうか。

ゲンジボタルとヘイケボタル**古賀 信夫**

毎年6月～7月頃になると新聞等で各地のホテルの名所が紹介され、どこの名所も見学の人々でにぎわっているようです。平成に生きる私たちでもあの光には引きつけられるようです。

ところでそのホテルですが、種類としてはたくさんあるようですが、有名なものにゲンジボタルとヘイケボタルがありますね。なんだか古めかしい名前がついているものですが、どうしてこんな名前がついたのか文明の利器インターネットで調べてみました。

グーグルで検索するとこの件についてたくさんヒットしますが、そこに記載された諸説を総合してみると以下のようです。

暗闇に飛び交うあの幻想的な光をみてすぐに連想されたのが、光と名がつく紫式部の「源氏物語」の主人公、光源氏だったようです。しかし一方では、あの光の乱舞からたくさんの人間の魂が飛び交う様も連想された。また、よく見ると強い光も弱い光もあり、強い者と弱い者をも連想させた。これは源平合戦になぞらえることができる。これらことから大きくて強そうな方をゲンジボタル、それに対して小さくて弱そうな方をヘイケボタルとよんだ。いずれにしても古の人々はあの光から生死に関わらず人の魂のようなものを感じていたようです。

これはあくまでもひとつの説ですので、この呼び名の由来について他の説を考えてみるのもおもしろいかもしれません。

例会報告

第358回例会

ホタルの夕べ

古賀 信夫

6月7日(土)午後7時より高良内校区コミュニティセンターにおいてホタルの夕べを行いました。国分副会長のホタルの話聞いた後、近くの高良川にホタルの観察に出かけました。たくさんホタルが乱舞し参加者一同ほたるの光にみとれていました。

岩下 夏子

久留米にも、あんなに大きな光を放つホタルが見られるとは、正直なところ驚きました。それと同時に、嬉しく感じました。ホタルの放つ光が、大きくて、力強くて...美しさに感激しました。

又、公民館でのホタルのお話の最後に、子供さんが、「どうしてホタルには源氏や平家という歴史の名前が付いているのですか?」と質問されたのですが、それを聞いて、子供さんの素直な心と、質問できる勇氣にとっても感心しました。

ホタルや自然を見て、感じる心を、いつまでも未来の子供達に、残すことも大人の役割だと改めて思う一日となりました。

第359回

キノコ観察会ときのこ汁会

角 正博

6月29日の高良台でのキノコ観察会の雨天中止の知らせを聞いて、私は、別の計画をすることにしていた。ところが当日の朝は、好天となった。梅雨の末期、こういう例はよくある。すると気になるのは、観察会をチラシや新聞を見たのみで問い合わせをしなかった人のことである。集合場所に立ち寄ってみると、すでに講師の金子先生や橋田会長の姿があった。そこへやはり花田さん一家5人がやって来た。中止の知らせをすると、子ども達が寂しそうな表情をした。それに気づいた金子先生の一声で、臨時の観察会となった。今年も松葉スワ池の周辺を回った。花田さん一家の3人の子ども達は、最初にコップ状のチャダイゴケ科のキノコを見つけると、すぐにキノコを見つけるのが上達して、鮮やかな橙朱色の小型のアカヤマタケ属のキノコを見つけたかと思うと、テングタケ、コテングタケモドキ等のテングタケ属の繊細な膜質のマント(ツバ)や袋状のツボを持った華やかな姿をしたキノコなどを次から次に探してきて、講師の金子先生も大忙しの日となった。



金子周平先生(右)と参加者

観察できたキノコのチェックリスト

同定 金子周平(福岡県森林林業技術センター)

ヌメリガサ科	アカヤマタケ
	オオヒメノカサ
キシメジ科	ハタケシメジ?
	カレバキツネタケ
	モリノカレバタケ
	モリノカレバタケ属の一種 (アマタケ?)
	ニセホウライタケ
	クヌギタケ
	クヌギタケ属の一種
テングタケ科	テングタケ
	ツルタケ
	テングツルタケ
	コテングタケモドキ
	ヘビキノコモドキ
ハラタケ科	ハラタケ属の一種
フウセンタケ科	キイロアセタケ
	アセタケ属の一種
	フウセンタケ属の一種
イッポンシメジ科	ミイノモミウラモドキ
	キイボカサタケ
	アカイボカサタケ
	イッポンシメジ属の一種
イグチ科	アマタケ?

	キイロイグチ
	ヤマドリタケモドキ
	コウジタケ
	ブドウニガイグチ?
	アカヤマドリ
ベニタケ科	クロハツ
	クサハツ
	ベニタケ属の一種
	チョウジチタケ
	キチタケ
	ハツタケ?
	チタケ属の一種
多孔菌科	ヒイロタケ
ニセショウロ科	ニセショウロ属の一種
コツブタケ科	コツブタケ
チャダイゴケ科	チャダイゴケ属の一種
ホコリタケ科	ホコリタケ属の一種
	子囊菌の一種

第359回例会

水辺の自然観察会と魚ツチング 丸山由紀子

7月20日、夏休み最初の日曜日に、くるめウス横のさくら橋下で「水辺の自然観察会」を行いました。参加者は大人と子供合わせて54名と盛会でした。魚類の解説を行った米田豊先生(久留米大学)をはじめ、水生生物や昆虫類、川辺の植物など、当会のメンバーがそれぞれ専門の分野で話しをして、河川の生態系について学び、考える観察会となりました。と言っても堅苦しい内容ではなく、子供達は川に入って大喜びでした。お父様達も、子供と一緒に(子供達よりも?)熱中して、魚獲りにはまっている姿が見られました。

久留米市民にとって身近な川である高良川もいろいろな生物が関係し合う一つの生態系をつくっており、人との関わりの中で川の姿も変化してきました。「魚ツチング」として単に魚を獲って観察するだけでなく、魚類の生態や食物連鎖、川辺の昆虫や植物との関係など、興味深いお話を聞くことができました。いろいろな視点で川を見ることが大切だと考えさせられました。

<観察した生物>

魚類

ムギツク・カワムツ・メダカ・ヨシノボリ・カマツカ・ギンブナ・ドンコ・モツゴ

水生生物

シロタニガワカゲロウ・キイロカワカゲロウ・サホコカゲロウ・ウルマーシマトビケラ・コガタシマトビケラ・ミズムシ・ヤゴ類・シマイシビル・ヒラタビル・カワニナ・マシジミ

昆虫類

クマゼミ・ニイニイゼミ・アブラゼミ・アオスジアゲハ・ナミアゲハ・イチモンジセセリ・ベニシジミ・ツマグロヒョウモン・モンシロチョウ・モンキチョウ・ヤマトシジミ・ゴマダラカミキリ・ショウリョウバッタ・クルマバッタ・マユタテアカネ・ハグロトンボ・ウスバキトンボ・キマダラカメムシ・ミナミアオカメムシ・チャミノガ・シオヤアブ・アメンボ

植物

アカメヤナギ・セイバンモロコシ・オオブタクサ・カナムグラ・オオカナダモ・マツモ

魚ツチング教しつにさんかして

合川小 いい田しょう大

とんぼのヤゴをつかまえました。とんぼのヤゴは水草の下にいました。あみでつかまえました。たのしかったです。またきたいです。

合川小3年 大坪るな

しょくぶつや魚やこん虫の事がよく分かりました!おしえて下さってありがとうございます。

京町小1年 こつぼじゅんた

おさかな1ぴきとちいさなめだかがたくさんとあめんぼが1ぴきとタニシが2ヶとれました。きょうはいろんなのがとれてたのしかったです。

今日は、いろいろな魚をつかまえたりしたことが、とてもたのしかったです。またらいねんで、おおきいのを、たくさんとりたいたいです。



高良川に入って魚獲りをする参加者

《行事案内》

◇ 第362回例会:

ネイチャーゲームと自然観察会

くるめネイチャーゲームの会と合同で、ネイチャーゲームと自然観察会を行いながら、四季の森経由で森林公園までいきます。雨天中止

[日 時]: 10月12日(日)

[集合]: 9:30 15:00

御井校区コミュニティーセンター 駐車場あり

[参加費]: 無料

[持ち物]: 弁当、水筒、帽子、筆記用具

[共 催]: くるめネイチャーゲームの会
市生産流通課

◇ 第363回例会:

高良山・四季の森

バードウォッチングウィーク探鳥会

春の子育て季節のバードウィークに対し、11月のバードウォッチングウィークは冬鳥たちが訪れ、山から里山に降りてきた鳥たちで賑やかになる頃です。新しく整備された高良山・四季の森の秋の探鳥会は、どんな鳥たちと会えるのでしょうか。

[日 時]: 11月9日(日) 雨天中止

[集合・解散]: 9:00・15:00 高良内幼稚園駐車場

[参加費]: 100円

[持ち物]: 弁当、水筒、帽子、筆記用具、あれば望遠鏡など。

[共 催]: 日本野鳥の会筑後支部、市生産流通課

◇ 第364回例会:

高良山キノコ観察とキノコ汁会

秋のキノコはどんなものに出会うのでしょうか。ワクワクしながら探しましょう。

[日 時]: 11月30日(日) 雨天中止

[集合・解散]: 9:30・15:30 高良内幼稚園駐車場

[参加費]: 300円

[持ち物]: マイはし、マイカップ、水筒

[共 催]: 市生産流通課

◇ 第365回例会:

冬の自然観察会と豚汁会

ゆっくり歩きながら四季の森経由で植物や昆虫たちが冬の季節にどのように過ごしているのか観察します。

[日 時]: 12月14日(日) 雨天中止

[集合・解散]: 9:30 15:00 高良内幼稚園駐車場

[参加費]: 300円

[持ち物]: マイはし・マイカップ・水筒

《事務局だより》

紙幅の関係で事務局便りはお休みです。

「久留米の自然を守る会」ホームページもご覧ください。<http://kurumenoshizen.net>

1. 会員消息 入会 笠陽子、古賀正子(久留米市)
退会 井上忠助、高木朋子(久留米市) 山口芳(篠栗町)

2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

3. 原稿募集

次号103号は平成21年1月1日発行予定です。原稿のメ切は12月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

4. 幹事会のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(10月1日、11月5日、12月3日)

久留米の自然

平成20年10月1日 第102号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827

久留米市山本町豊田2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 (有) プリンティング コガ

TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029